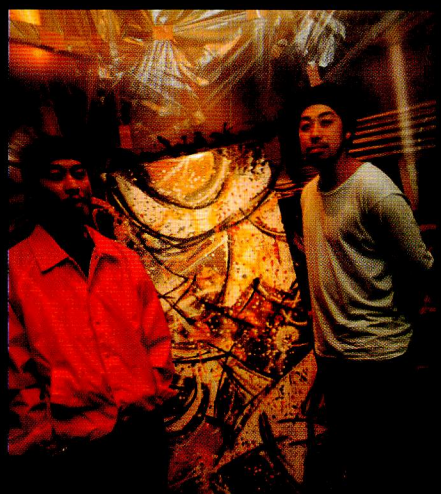

今宵の案内人である「AURA」濱田さん（左）が求めるのは「人が『感じる』『集える』場」。その要求に応えられるのはやはり「Ace cafe」か。「ま、オレは外で受付でしたけど（笑）」とはオーナーの木田さん

Watching Carefully

取材・文／トライアウト　撮影／遠藤基成

東京を拠点に、日本各地で活躍するCODE;C。躍るようなステップとともに描かれる概念的な筆致とデザインコンシャスな構図に、オーディエンスは瞠目

ペインティングの果てに現れしは ただの幾何学模様か はたまた「自由」の象徴か

VISIONARY@Ace cafe

ライブペインティングを見たことはおありだろうか。その醍醐味はその刹那をギュッと搾り、キャンバスにグッと濃縮還元することだ。イラストレーターが通常、作品をつくる場合、長いものでは1カ月以上を要するものもあろう。それこそ、何年がかりの作品とてあろう。それをイベントの中の数時間で完成させる、その緊張感と集中力はいかばかりか。

今宵、その場を案内したのはセレクトショップ「AURA」の濱田さん。「自分の生きてきた経験を京都で形にしたかった。今宵は映像×服×ライブペインティング×グラフィック×音で『何かを感じる』のが目的」とのことである。その場＝「Ace cafe」で描かれたものは何か。

アーティストはfrom東京のCODE;C。CLSの岡沢さん、NEXUS7の今野さんらDJを従え、今宵初陣の3ピース「MAD;SKILLZ」と4dの古宇田さん＆TRANSPORTの高瀬さんと共にペインティングスタート。ファッショナブルなオーディエンスの前で、描く。刷子で、あるいはスプレーで…キャンバスに渦巻く幾何学模様と色、そして消えては浮かび、浮かんでは消える図像。その果てに現れしは闇夜に浮かぶ刹那の肖像。

昨日でも、明日でもこの作品は生まれなかった。完成の瞬間、唯一無二の存在となった時空。曰く、「それが『自然体』じゃなかったでしたっけ？」。

このイベントが、昨今の予定調和的イベントとは違う何かを生み得たかどうかは、ここ木屋町で今後の歴史が語るだろう。